

私はこの度、我が大学の国内研修制度を利用して、北海道の厚沢部町へ赴いた。そこで、過疎化が進む地域におけるまちづくりに焦点を当て、行政や民間による様々な地域おこしの活動を見学させていただいた。

厚沢部町は人口 4400 人ほどの比較的小規模な町であり、メイクイーンが主な特産物である。また、高齢化率の抑制や町内の活性化が地域全体の課題とされている。ここまでは、一般的な地域と同じである。しかし、ここ厚沢部町では「素敵な過疎づくり」と称し、過疎化を逃れられない事態として受け入れ、今あるものを大切にすべきと考え、町内の住民にとって過ごしやすい町を目指して活動しているのだそうだ。こういった厚沢部町の概要や活動を知ったのは、秋学期の授業内にて厚沢部町で活動している OB の方の講演があったためである。彼は地域おこし協力隊と呼ばれる団体に所属しており、行政によって様々な課題を抱えた地域に派遣され、まちづくりに貢献するための活動をしているとのことだった。彼の話聞き、私は彼の所属している協力隊の活動に興味を持ったとともに、厚沢部町に行っている「素敵な過疎づくり」をもっと深く知りたいと感じた。そこで今回、移動を含め約 1 週間の研修を計画し、実際に厚沢部町の様々な活動を自分の目で見て多くのことを学ばせていただいたという次第である。

厚沢部町の役所や福祉施設に向かう予定になっていたのだが、そのどれもが街の中心部にあり、非常に便利だと感じた。過疎化が進むにつれて、地域の主要施設を中心部に寄せて街のコンパクト化を図る動きをよく目にするが、厚沢部町では早い段階でそうになっており、町民や行政の連携がなされていることが窺い知れた。

研修中でのコンテンツを大まかに分けて紹介していく。

・町内の方々へのヒアリング

厚沢部町の役場では町のお役人の方や、厚沢部町の広報を担当されている方などからお話を伺った。町長と副町長と実際にお会いし、行政から見た厚沢部町や、街の活性化に向けて取り組んでいることとお聞きした。2015 年末、高齢者に対して 3 万円の給付金を与えることが発表されたが、厚沢部町ではすでにその数年前から「素敵な過疎づくり」として高齢者に対して現金の給付を行ってきたのだそうだ。こういった例を挙げながら、地域政治の柔軟性の高さによるまちづくりへの取り組み方などを説明していただいた。また、広報を担当されている方からは、町をプロデュースするという役割から、まちづくりのノウハウを学ぶためにお会いした。実際に広報が発行されるまでの流れなどをお伺いしながら、町内における広報誌の役割や課題をお聞きした。厚沢部町では「広報あっさぶ」と呼ばれる広報誌を毎月発行しており、町内のニュースや生活情報を掲載しているとのことだった。こういったローカルな広報誌は、住民間の情報共有において非常に重要であり、町内の連携に大きな影響を与えていると考えられる。

実際に町内で生活している農家の方からも厚沢部町や町内の農業についてお話を伺うことができた。厚沢部町はメイクイーンの生産地として有名であるが、町外からの需要が高

なくなったにつれ、町内から求められてきたものと異なることに農民の方はギャップを感じていた。高い需要に伴ってジャガイモの生産量は上がっていくが、同時に規格外の作物も増える。こういった規格外のものは町内では消費できても、見栄えを気にしがちな都心の人間には売れず、処分してしまうことにもったいなさを感じているとのことだった。そのため、今回お話を伺った農家の方は、農業をしない冬場にそういった規格外の作物などを使って加工品を作り、町外に売り出す働きをしていた。加工品にすればおいしさはそのままに町外の人にも消費してもらえる。しかし、現在このような自家製の加工品を販売する方法が道の駅か東京の汐留におかれている厚沢部町のアンテナショップしかなく困っており、また生産者として加工品を直接つくっていることをもっと多くの方にしてほしいと話していた。私としても、この方の加工品は非常に魅力的だと感じ、さらに多くの場所で売り出してほしいと思った。農作物を育てた方の名前や写真を載せて販売していることがよくあるが、加工品においても制作者の情報を明記することでさらに商品のブランド性を上げ、販売の拡大につながるのではないだろうか。

現在、厚沢部町では7人の地域おこし協力隊のそれぞれが農業や福祉、医療などの様々な技術を用いて町内外にアプローチをしながら活動を展開している。今回は音楽療法を用いて認知症予防を行っている方とお話をすることができた。普段から、高齢者や認知症についての知識はある程度あったが、実際に認知症の方々と関わっている方から現状について聞くことができ、今まで学んできたことの真偽を確かめる機会となった。

- ・イベントなどを通しての住民との交流

前述した音楽療法を行っている方が実際にデイサービスの施設でしている認知症予防の活動に我々も参加させていただいた。音楽療法について実際に体験しながら学ぶことができたとともに、温かみのある町民の方々と関わるすることができた。また参加者の方々に対しても我々がお話を持ち掛けることにより、非日常の空間を形成し心身に刺激を与えることで、認知症の予防へ少しでも貢献できたのではないかと考えている。

地域おこし協力隊について更に学ぶため、協力隊の方々の日常的な活動にも同行させていただいた。町内の小学校に訪問し、放課後の学童の子供たちの対応補助に協力した。小学生との交流の中で、町内における若者の重要性について改めて認識し、幅広い協力隊の活動を身をもって体験することができた。

有料老人ホームにもお伺いし、介護予防として行われている運動教室に参加させていただいた。札幌からインストラクターをお呼びして毎回行っているのだそうだ。厚沢部町の方々は、こういったイベント等に対して生き生きと、まさに生きがいを持って活動しているように見えた。冬場外出しにくい雪国だからこそ、積極的に外出する目的を作りそれを実践している高齢者の姿勢に感心させられるとともに、認知症や介護の予防に対する継続的な活動の重要性を知る機会となった。

・町内の施設の見学

地域活性化における先駆的な取組を果たしているとして重点道の駅に指定されている、厚沢部町の道の駅を見学した。施設内部には薪ストーブや観光案内の液晶パネルが置かれており、町内外の人にとって非常に利便性の高い施設となっていた。

「ちょっと暮らし住宅」と呼ばれる、移住を目的とした方が短期的に滞在するための一戸建て住宅を見学した。国内の各所に点在しているこの施設は、厚沢部町内には4か所あり、それぞれが別の建築家によって建てられている。4棟とも全く異なるデザインであり、高齢者に向けた和風の平屋や、若い方に向けた近代的なつくりを採用しているところもあり、様々なニーズに対応することで、広い年齢層の移住者を受け入れる働きかけをしていることが窺い知れた。これらは、厚沢部町の移住に踏み切れない方に対するワンクッションの役割を果たすためだけでなく、厚沢部町そのものに対するリピーターを増やすための一助にもなっている。約数週間滞在している間は、町の一員として扱われ、町民との交流も活発に行われているようだった。

最後に、今回の研修では厚沢部町や地域おこし協力隊について学ぶために、様々な施設や住民のお世話になった。この町から、知識としてのプラスだけではなく、個々の価値観や人間性においてもプラスに働くような経験をさせていただいたことに、最大限の感謝をしたい。今後のゼミでの活動や研究などに今回の研修での経験を生かせるように心がけていきたい所存だ。